

小泉八雲直系が説くラフカディオ・ハーン文学の神髄

西尾康英

松江北高 1976年卒、27期(理数科6期)

樺会 東大和南街クリニック院長

(2025 年11月 ばけばけと総会講演によせて)



ヘブンの松江上陸でいよいよ佳境に入ってきました。ラフカディオハーンとセツが松江で暮らした1年がドラマの中心、とプロデューサーが言っていたので大いに期待しましょう。ヘブン先生と松江中学の大先輩との交流も今後取り上げられ、どのような人物が登場するか楽しみです。エキストラの生徒は、現代からタイムスリップしてきたようで役作りができていないのは仕方ないにしても、メインキャストの話す出雲弁も、日本人英語と同様、単語をつなげただけで本物ではないですよ。テレビもラジオのない明治時代の松江は、町中にお国言葉がこだまし、言葉には魂がこめられている、と言われるように、セツが出雲弁で語った昔話や神話の音調の中に込められた霊界からのメッセージをヘブンが感知し、創作のインスピレーションになったのではないのでしょうか。

わたくしも出雲弁空間には4年間しかおらず、理解はできますがしゃべれない、英会話のできない英語学習者みたいな似非出雲人ですが、東北のズーズー弁とは異なる、独特のアクセントとイントネーションには今でも親しみを感じます。せめて県知事役の佐野史郎さんだけでもピュアな出雲弁をしゃべってほしかったです。1970年台の北高には数学の井上先生のほかにも純粋な現地語で授業をされる先生も何人かいました。松江三中でも国語の野崎先生という名物教師がバイリンガルで授業し、しゃべり言葉は出雲弁で通し、教科書を読むときは標準語で行い、生徒がなまったアクセントで読むと出雲弁保存会だ、といって叱っていたのを思い出しました。学園祭で高2が行うクラス出演という企画に、どのクラスかが、出雲弁版ロミオとジュリエットを演じ、ヒロイン役が、どなただったのでしょうか、せりふをすべて完璧な出雲弁でしゃべり、聴衆は大喝采でした。

松江の秀才大磐石、錦織友一こと西田千太郎教頭も注目して見えています。双松会名簿の職員欄にラフカディオハーン(小泉八雲になったのは東京に出てからなのですね)と同じページに校長として載っていました。家庭の事情で松江中学を中退して独学で教員資格をとった苦勞人で、卒業生名簿には名前がありませんが、20歳代で教頭に抜擢された人格的にも優れた偉大な先輩です。東京での松野トキとのや同郷人との会話の中で、幽霊や神話など異界の説話を、時代遅れの未文化の象徴、と否定していたのが、今後のヘブン、トキとの交流の中でどのように出雲文化を肯定するように化けていくのか、展開が楽しみです。ヘブンとトキとの人的交流だけで終わってしまうのでしょうか。

八雲の創作のソースである主人公の小泉セツの語り部としての資質がどのように形成されたのか、松野家の信仰背景が全くドラマでは描かれていなかったのは残念です。お化け好きの少女でなく、出雲宮司の家の出である養母稲垣トミから引き継いだ、異界との交流ができるミーディアムとしてのセツの特殊な才能、霊性のルーツが演出されていないのは、脚本家がそこまで日本の幽玄世界、怪談の原点を理解していないのか、初回の藁人形、五寸釘の場面には仰天、失望しました。先祖供養や氏神信仰など出雲人の信心はもっとピュアなものです。

総会での小泉凡さんの講演でもそのことが感じられました。100年以上前に小泉八雲が小説、評論を通じて世界に訴えたのは、知られざる東洋の国の神話とオカルト世界の紹介でなく、異文化を通じた多様性の理解と受け入れ、という現代世界にも通じるメッセージだ、と最後を締めくくられたのは素晴らしいことですね。

出雲には古代より大和で6世紀末に起きた宗教をめぐる内戦も、戦国時代にも戊辰戦争でも大きな戦はありませんでした。大和の神も出雲の神もきょうだい同志で同じルーツだと喝破し、争うことなく政権委譲した国譲りの神話こそ平和の国出雲の根本思想です。先祖と神は兄弟であると記されているのに今も戦争を続けているどこかの一神教国家は見習うべきですね。戦争犠牲者だけでなく、貧困や人身御供で命を落とした名もなき庶民に対しても、説話を通じて弔い供養する出雲人の信仰心こそ、ドラマの端々にも垣間見られるラフカディオハーンの優しさと共鳴した世界的な文化資産ではないでしょうか。